



UNIVERSITY  
OF  
YAMANASHI

山梨大学附属図書館報

ISSN 1348-5458

# やまなし

2010.11.30

vol.8

no. **1**

## contents

- 2 知のバランス
- 4 利用者の声
- 5 学生にすすめる本
- 6 図書館統計
- 7 図書館トピックス

- 講演会「日本社会といのち」を開催
- 連続講座「子どもと本を学ぶ・連続講座」を開催
- 「まちなか子ども図書室・ハロウィン」を開催
- 8 ● 環境整備工事の完了

今後のイベント紹介

The Yamanashi  
Bulletin of the University of Yamanashi Library

## 知のバランス

工学部長 トヨキ ヒロヤス  
(工学部 循環システム工学科) 豊木 博泰

後期の授業が始まったころ、宛名に「工学部長」と記された郵便としてはめずらしい肉筆の手紙を頂いた。手紙は、社会学を専門とするN氏からのものであった。N氏は、循環システム工学科が新設されてから数年、この学科に所属し、その後、別の大学に移られた。私が書いた工学部同窓会誌の巻頭言を見て、激励の手紙をくださったのである。懐旧話と氏の近況を記した後、「かつてお教えいただいた相転移のこと、いつも頭において勉強しております。」とむすばれていた。儀礼的な意味合いも多少はあるだろうが、窓から入る秋風に似て清々しく、学期の変わり目にはありがたい激励の文であった。

「相転移」とは、多数の要素からなる系において表れるマクロな形相の不連続的な変化のことであり、私の専門である統計物理学の一テーマである。個々の要素の振る舞いを記述する法則には不連続性がないのに、マクロな性質には不連続性が表れるということのために、生物や人間集団において起きる不連続な変化を理解するのに比喩的に用いられることがある。もともとは自然現象を理解するために使われた概念が人文学（ここでは人間、社会に関係する学をそう呼ぶことにする）の領域で用いられることはよくあり、自己組織化、複雑系、予測不可能性（カオス）などはその代表格であろう。循環システム工学科ができたころ、この学科の存立意義をめぐって「熱い」議論が交わされた。異分野融合

は可能か、課題指向（ミッションオリエンテッド）の学科は可能なのかについてである。「相転移」はそうした機会に使われたのであろう。

記憶はあいまいだが、私が吹っ掛けた議論は、世紀の変わり目ころにあった世界的な話題と関連していたように思う。90年代半ばにソーカル事件というのがあった。場の理論や統計力学を専門とするニューヨーク大学のソーカルが、人文学系の有名な学術雑誌「ソーシャル・テキスト」に「境界を侵犯すること：量子重力の変換解釈学に向けて」という論文を投稿した。この論文はじつは、自然科学の用語を多用するポストモダニストが、自然科学に対して無理解のまま用語を濫用していると感じたソーカルが、そのことを示すために仕組んだに疑似論文だった。数学、理論物理学からするとでたらめな言辞を並べたものであったのだが、論文は受理され掲載された。以来、ポストモダニストが使う自然科学発祥の用語、概念を巡って、またソーカルの行為を巡って激しい論争が繰り広げられたのである。ソーカルらの著作「『知』の欺瞞」の訳が岩波から出版されたのが2000年のことであり、N氏がいたころと重なる。

「『知』の欺瞞」をとぎれとぎれに読んでいたころ、佐藤文隆氏がこの事件について、「本人達が意識するとしないとにかかわらず、アメリカの大学での学生獲得やポスト争いも絡んでいとも言われている。同じ穴のムジナの共食いの構図に筆者にはみえるのだが。」と揶揄的な論評をしていることも知った。（「『科学の終焉』とは」岩波講座・「科学／技術と人間」第11巻「21世紀科学／技術への展望」所収）。「科学と幸福」（岩波、1995）など佐藤氏の著作



には共感するところが多かっただけに、この論評には違和感をおぼえた。が、最近はそのかもしれないと思っている。自然の法則性を記述するのに用いられた言葉を、人文学のなかで使ってもらえるようになることは、それだけ注目してもらえたということであり、理解がなっていないといきり立たつほどのことはない。ある論述の権威付けのために異分野の概念を濫用することは批判されるべきであるが、人文学の対象を理解するための概念装置を数学や基礎物理学のような異分野から借りることはむしろ勧めてよいのではないか。同じ言葉を使っているとしてもそれが指し示す内容や連関が違うことはあり得ると寛容に構えていけばよい。

そのように考えるのは、学科の存立意義を「だし」にして、社会と科学／技術のあり方に関して議論し思考したことが貴重な経験であったと思えるからである。また、私が人文学の書物を聞きかじりで引用しながら科学や技術のあり方についてものを言うことに寛容であって欲しいと願う（こうした文章を書く機会が多くなった）昨今の立場からの自己弁護という側面もある。

他への寛容が失われがちな時代である。社会の大学への風当たりが強くなるのもその一つであろうか。ウェーバーが「職業としての学問」を語った時代と同様、学問ではなく別の「救世主」的な存在に傾倒する傾向が表れてもおかしくない。いかに生きるべきかに直接答えるものではない学問の世界に身を置く者がどういった問いに対してまっとうに答えるのか、20世紀の経験を経てウェー

バーの説教は、ちょっと荒っぽい言い方だが、問い直されてしかるべきだと思う。迂遠だがそれが大学への公的支援を安定的に得る方途なのであろう。その意味で、人文学それ自体への期待と私のような自然科学の人間との対話への期待を込めて、佐藤氏と「同じ穴のムジナ」と言えるかもしれないが、統計物理学の先達である蔵本氏の言葉を引用して、書物を通じた対話の場としての図書館への期待を表したい。



「かつて私たちの祖先を包んでいた文化のように、『私』と世界の関係や生や死について、科学的な語り以外のさまざまな語りをもつ文化が今求められている。人間の問いには、科学的な事実記述によって答えられる問いと、そうでない問いがある。後者には答えがないゆえに問う意味もない、と根拠もなく錯覚されているような現代は、ある意味で文化の貧困な時代といわざるを得ない。事実的な知のみが知であるはずがない。物語的な知によって適切に答えられるべき問いが、不当に抑圧されている時代は豊かな時代とは言い難い。本書の最大のテーマである、『知のアンバランス』の究極の姿をここに見る。」

（「新しい自然学-非線形科学の可能性」, 蔵本由紀, 岩波, 2003）

紹介された本			
 <p>401 本館 2階 一般書架</p>	 <p>408 本館 2階 一般書架</p>	 <p>404 本館 2階 一般書架</p>	 <p>401 本館 2階 一般書架</p>
<p>「知」の欺瞞 アラン・ソーカル, ジャン・ブリクモン著</p>	<p>21世紀科学 /技術への展望 中村雄二郎 ほか著</p>	<p>科学と幸福 佐藤文隆著</p>	<p>新しい自然学 蔵本由紀著</p>



## 大きな進化をとげた図書館

キムラ ノゾム  
医学部 医学科5年 木村 望

五年生になり、実習に出てより深い専門知識を学んでいく中で図書館には大変お世話になっています。今年の図書館は二点大きく改善しました。

まず、一点目は新刊書の購入です。今年は沢山の医学書を購入して頂きました。そのお陰で自分の持っている教科書には載っていない様な現代の医学の詳細まで学べる様になりました。そして私たち学生が購入してもらいたい本を自由にリクエストできるようになり、医学書以外にも自分の興味を持った本を読めてとても嬉しく思っています。

二点目は勉強スペースの増設(個人機の増設)です。2階の今まで大机があった場所は全て個人機になり、より一人でも多くの方が勉強ス

ペースを確保できるようになりました。そして隣とは仕切りがある為、隣を気にせず自由に勉強することができ、高校時代通っていた予備校の自習室を思い出させる様な光景が広がっておりどこか懐かしさを感じます。

今年、図書館は以上の点で大きく改善しました。より活用しやすい場所となり、これから図書館を利用する人がさらに増えていくことでしょう。

最後に一点改善していただきたい点があります。それは空調管理の点です。夏の図書館はとても暑いです。扇風機は何台か回っていましたが、一部の人にしか風が行き届いていませんでした。冷房を入れていただくなどもう少し空調管理をしていただくとより快適に利用できる図書館になると思います。

[医学分館]

の 利 用 者 の  
声 用 者 館

## 図書館とサービスについて

タカマ ヨウヘイ  
大学院 教育学研究科 学校教育専攻2年 高間 陽平

図書館は人々が甲府キャンパスを歩いているとすぐに目に入る建物の一つであろう。しかし学生であっても利用する人は多くないと聞く。さらに、利用者の多くは十分に図書館の持つサービスを使いきれないでいることも考えると、本当に「もったいない」と思わずにられない。ますますサービスを向上させている図書館の利用を強くお勧めしたい。現在の図書館は、考えている以上にさまざまなサービスが受けられ、欲しい図書を購入してもらおうことさえできているのである。

今年からは「学生リクエスト」サービスが本格的に始まり、学生がリクエストした図書を積極的に所蔵してもらおうことができるようになった。欲しい、でも高く買えないような図書をリクエストするとよいのではないだろうか。

山梨大学に在籍して6年目になるが、ここまで図書館のサービスが向上したという記憶はない。私に

4 YAMANASHI vol.8 no.1

としては学生リクエストが特筆すべきものだったが、他にも館内の改装によってトイレが新しくなった他、新調された机・椅子が設置された。また図書館に関するアンケートが実施され、OPACの意匠が新しくなった。多くの利用者にとっても、図書館はより使いやすく居心地のよい図書館になったといえる。

最近「調べてみたが、ネットになかった」ということで情報収集を終えてしまうことも多くなってきている。しかしそのような時には図書館を利用すべきである。いろいろなサービスを駆使すれば、必ず「使える」資料が見つかるだろう。蔵書数は多いとはいえない場所であるため、「使える」資料に触れる機会を多くする必要がある。だからこそ「学生リクエスト」のようなサービスは評価したい。しかし、既に学生リクエストをインターネットでもできるようにして欲しいという声もある。これからも図書館のサービス向上を期待している。

[本館]



## 『評伝 山に向かいて目を挙ぐ 工学博士・広井勇の生涯』

高崎哲郎 著  
鹿島出版会

イシイ ノブユキ

工学部 土木環境工学科 石井 信行

「山に向かいて目を挙ぐ」は旧約聖書の箴言にある一句である。この句を見て、文系の学生はここ甲府に縁のある太宰治の短編「桜桃」を思い浮かべるかもしれないが、本書は明治・大正期に日本の近代国家建設に多大な貢献をしたエンジニアについての物語である。

本書は複数の資料を基に、江戸時代末期の高知の武家に生まれ、明治維新によって社会的存在意味を失ってしまった武士の子として、学問を修めるために幼くして東京に出て、そこからさらなる可能性を求めて札幌農学校（現在の北海道大学）に二期生として16歳で入学し、その後東京帝国大学教授として後進の育成にあたった広井博士の人生を描いている。札幌農学校での内村鑑三を始めその後の日本に影響を与えた人々との出会い、アメリカでの土木エンジニアとしての修行の日々、帰国してから建設に携わった港湾や社会基盤施設の諸々について、

広井博士の人となりを示すエピソードと共に紹介されている。

資料からの引用が多いため、時間の流れが前後するので多少読みにくく、文章によって物語に引き込まれて行くことは無いが、困難で不確かな時代にあって、ひとりのエンジニアが何を頼りに、どのように生きたのかを知ることが、人生の目的や目標が見つけない今日の社会において、違う分野を学ぶものにとっても参考になる。

人生において何を目指すのか、「山に向かいて目を挙ぐ」という姿勢でものごとと向き合うことにより見えてくる。

289.1

本館2階 一般書架

るす学生  
本すすめに

## 『人を伸ばす力ー内発と自律のすすめ』

新曜社

エドワード・L・デシ, リチャード・フラスト 著 桜井茂男 監訳

ニシダ ヨリコ

医学部 基礎・臨床看護学講座 西田 頼子

本書では、人が何かに動機づけられるとはどういうことか、「内発的動機づけ」、「自律性」とは何かについて、わかりやすく解説されています。様々な研究をもとに外から動機づけられるよりも自分で自分を動機づける（内発的動機づけ）ほうが、創造性、責任感、健康な行動、変化の持続性といった点で優れていることを明らかにし、内発的動機づけの源の一つとして自律性への欲求があり、自律性を支援することの重要性も解いています。

私が大学院生のころ、患者の自己管理行動の動機づけと自律性についての著者の論文を読み、本書にも出会いました。当時、多くの患者さんや自分自身の経験から、「自分自身でやろうと思わなきゃ行動しない、できないのは当たり前。やらされても長続きしないし、良い結果をもたらさない。自分からやっている人はストレスも少なく、不満も少ない

のではないだろうか・・・。」などと漠然と考えていた私の頭をすっきりと整理してくれたことを覚えています。

本書の帯には「人間観が一変する本」と書かれていますが、そんなに大層なことではないかもしれませんが、むしろ、当たり前であったり、今まで何となく感じていたことであったり、「そうそう、そうだよ」と共感できることが、たくさんあるのではないのでしょうか。と、同時に、意外とそうありたくてもできていない自分にも気づかされたりします。看護の学生だけでなく、人と接する全ての学生の方に読んでみてもらいたい本です。

141.72

HIT

医学分館2階 第2閲覧室



# 図書館統計



## (1) 開館日数・入館者数

区分	開館日数	入館者数(人)		
		学内者	学外者	合計
本館	265日	124,609	2,583	127,192
分館	286日	127,519	514	128,033

## (2) 館外貸出冊数・参考調査取扱件数

区分	館外貸出冊数(冊)				参考調査 件数
	学生	教職員	学外者	合計	
本館	28,666	2,258	1,295	32,219	3,060
分館	12,449	2,526	453	15,428	3,018

## (3) 相互利用

区分	貸借(単位:冊)		文献複写(単位:件)	
	貸出	借受	受付	依頼
本館	287	368	2,028	2,220
分館	117	67	2,774	3,531
合計	404	435	4802	5,427

## (4) 子ども図書室

開館日数	126日
入室者数	1,823人
貸出券発行人数	106人
蔵書冊数	3,895冊
貸出冊数	3,153冊

## 2 図書館蔵書統計

### (1) 図書・雑誌蔵書数 (H22.3.31現在)

区分	図書(単位:冊)			雑誌(単位:種)		
	和図書	洋図書	合計	和雑誌	洋雑誌	合計
本館	370,679	133,920	504,599	7,071	2,387	9,458
分館	59,231	49,371	108,602	2,281	1,385	3,666
合計	429,910	183,291	613,201	9,352	3,772	13,124

### (2) 図書・雑誌受入数 (H21年度)

区分	図書(単位:冊)			雑誌(単位:種)		
	和図書	洋図書	合計	和雑誌	洋雑誌	合計
本館	8,049	1,043	9,092	2,718	262	2,980
分館	2,333	805	3,138	560	134	694
合計	10,382	1,848	12,230	3,278	396	3,674

## 3 電子ジャーナル統計

### 電子ジャーナル (2009/1~2009/12) fulltext ダウンロード件数

Science Direct	94,536	Karger	1,446
Nature Group	9,619	Science	3,139
Wiley InterScience	17,296	Oxford University Press	4,252



## 図書館トピックス

- 講演会「日本社会といのち」を開催
- 「子どもと本を学ぶ・連続講座」を開催
- 「まちなか子ども図書室・ハロウィン」を開催
- 図書館環境整備工事の完了

### ◎ 講演会「日本社会といのち」を開催しました。



10月21日(木)、医学部キャンパスにおいて、「いのちの電話」創設メンバーであった林義子氏を講師に迎え、地域貢献事業講演会「日本社会といのち」を開催しました。この講演会は、平成22年度山梨大学附属図書館医学分館地域貢献事業として実施したもので、講師は、1970年に創立された「いのちの電話」の創設に関わり、20年間スタッフとして働いてきたこと、「いのちの電話」は社会を映している鏡であり、子どものいじめ・不登校・家庭内暴力などの問題に触れ、社会及び

経済状況がひとりひとりに与える、命に関わる影響が強いと感じられることを体験したと述べ、生活にゆとりをつくり、週に2日くらいは家族と過ごす、友達とゆっくり話すなど人との関わりを大事にしていくことが大切であるなどと講演しました。

参加者からは、「看護師を目指し、大学に入るために勉強中だが、命の大切さについて改めて感じる事ができた」「日本の社会状況と子どもの変化についてわかりやすく解説してくださり、とても参考になった」「「いのち」について自分の問題であると考えていることは少なかったが、人との関係について日常的に大事にするように考えていきたい」などの感想が寄せられました。



### ◎ 「子どもと本を学ぶ・連続講座」を開催しました。

- |     |                   |           |            |
|-----|-------------------|-----------|------------|
| 第1回 | 子どもと本との出会い        | 6月22日(火)  | 講師 深澤 敏弘 氏 |
| 第2回 | はじめてのブックトーク       | 7月29日(木)  | 講師 青木 淳子 氏 |
| 第3回 | ワークショップ・昔話を子どもに語る | 8月12日(木)  | 講師 藤巻 愛子 氏 |
| 第4回 | 子どもの本や紙しばいを作りたい!  | 11月18日(木) | 講師 下園 昌彦 氏 |

「子どもと本を学ぶ・連続講座」第1回～第4回を開催しました。毎回多才な講師を招き、多くの



参加者が熱心に聴講しました。第1回は深澤敏弘氏(南アルプス市図書館協議会会長)が本と子どもたちとの貴重な体験について、第2回の青木淳子氏(元公共図書館及び学校図書館司書 キラキラ読書クラブメンバー)は初心者にもやさしいブックトークについて、藤巻愛子氏(山梨むかしがたりの会主宰・日本民話の会会員)は甲州弁による昔話の語りについて、下園昌彦氏(童心社 編集長)は編集の仕事ならではのエピソードを交えた講演をしてくださりました。

### ◎ 「まちなか子ども図書室・ハロウィン」を開催しました。



子ども図書室では、読売新聞甲府支局と共催で平成22年10月23日と24日の2日にわたり、甲府市中心商店街の空き店舗を利用して「まちなか子ども図書室・ハロウィン」を開催しました。

この企画は、教育人間科学部幼児教育講座の学生を中心とした子ども図書室学生ボランティア(約30人)が企画したもので、教育の成果を甲府市中心街の活性化と結びつけて行いました。2日間で子ども約180人が訪れ(親御さんを入れると400人くらい)大盛況で

した。工作や折り紙を夢中で作り、絵本の読み聞かせや紙芝居、パネルシアターなどに目を輝かせて見入るなど、子どもたちは学生ボランティアと楽しい時間を過ごしました。



## ◎ 館内環境整備工事の完了について



## 🏠 本館 環境整備工事の完了

環境整備工事が終了しました。利用者の皆様には、騒音などご迷惑をお掛けしましたが、トイレや3階閲覧室などの設備が一新され、より良い学習環境へと生まれ変わりましたので、皆様の更なるご利用をお待ちしています。

## 🏠 医学分館「2階閲覧・学習スペース」を拡大

医学分館の閲覧・学習スペースは、1学年100人を想定した広さのため、現在の1学年185人では非常に狭く、学生さんから座席数増加の要望が強く出されていました。このため、図書館では利用率の少ない資料を甲府本館地下書庫に移設し、2階書架の一部を撤去することで、閲覧・学習スペースを拡大しました。ここに全て1人用の机を設置し、従来より50%増の有効席数を確保しました。

早速、多くの学生さんが利用されていますが、席数は増加したとはいえ、試験期等は余裕がなくなります。どうぞ利用マナーを守って利用してくださいようお願いいたします。



## 🍁 今後のイベント紹介

### [連続講座] 平成22年度山梨県・山梨大学連携事業 「子どもと本を学ぶ・連続講座」(全5回)のご案内

子ども図書室では、山梨県と山梨大学の連携事業の一環として、山梨県教育委員会と山梨大学の共同企画により、「子どもと本を学ぶ・連続講座」(全5回)を開催しています。子どもと本・読書に関わる諸テーマで講演・ワークショップを行っています。次回が最終回です。

## 第5回 シンポジウム「子どもに本を手渡すということ」(仮)

日時：平成23年1月27日(木) 午後2時～(予定)

場所：中央市立玉穂生涯学習館 視聴覚ホール

\*事前にお申し込みが必要です。

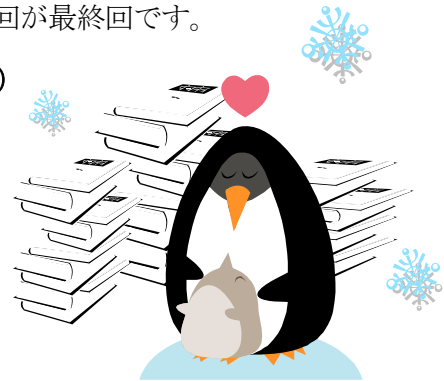
## お申し込み・お問い合わせ

山梨県教育庁 社会教育課 社会教育振興担当

〒400-8504 甲府市丸の内一丁目6-1

TEL 055-223-1771 FAX 055-223-1775

Email:shakaikyo@pref.yamanashi.lg.jp



主催：山梨県教育委員会・  
山梨大学附属図書館子ども図書室

◆イベント詳細については、ポスター・パンフレット・山梨大学附属図書館ホームページ等でお知らせいたします。皆様のご参加をお待ちしています。

## 学外の方への利用案内

本館及び医学分館は、山梨大学以外の大学生をはじめ一般の方々も利用できます。詳細については、<http://www.lib.yamanashi.ac.jp/>をご覧ください。本館 Tel:055-220-8066 (情報サービスグループ)、医学分館 Tel:055-273-9357 (医学情報グループ)にお問い合わせください。



● 表紙撮影：図書・情報課 職員  
場 所：山梨大学(甲府キャンパス)

### 山梨大学附属図書館報 「やまなし」 第8巻第1号

2010年11月30日 発行

編集：館報編集委員会

発行：山梨大学附属図書館

〒400-8510

甲府市武田四丁目4-37

TEL 055-220-8063